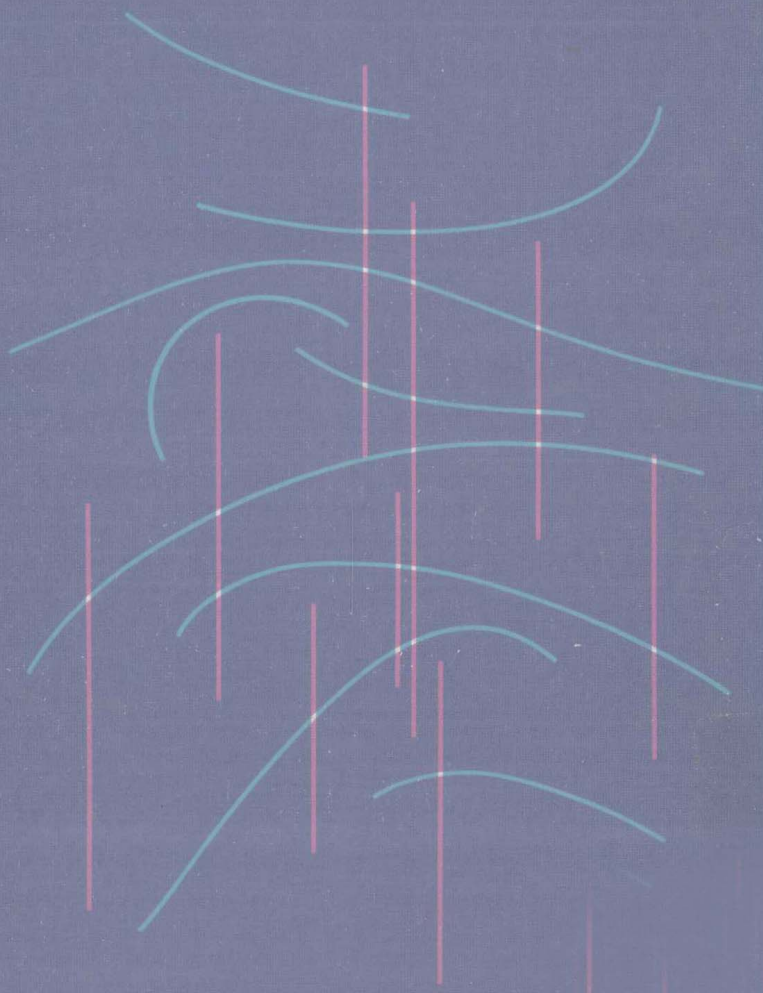


現代名歌選

久保田正文 編



げん だい めい か せん
現代名歌選



高校図書館用

新潮文庫 草 192 A

昭和五十五年四月一日発行

編者

久保田正文

発行者

佐藤亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部〇三(二六六)五一
編集部〇三(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

装幀 麴谷宏

Ⓔ 印刷・大日本印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Shinchōsha 1980 Printed in Japan

乱丁・落丁のものは本社にてお取替えいたします。

新潮文庫

現代名歌選

久保田正文編

新潮社版

目次

落合 直文	九	後井 嘉一	四
佐佐木信綱	三	宮 柊二	七
与謝野鉄幹	二〇	正岡 子規	二
与謝野晶子	二六	岡 麓	七
山川登美子	三	伊藤佐千夫	八
北原 白秋	三	長塚 節	八
吉井 勇	四	島木 赤彦	九
岡本かの子	五	斎藤 茂吉	一〇
穂積 忠	五	平福 百穂	一〇
木俣 修	五	中村 憲吉	一一

土屋 文明

一六

結城哀草果

一五

土田 耕平

一三〇

松倉 米吉

一三四

鹿兒島寿藏

一三七

五味 保義

一四三

金田 千鶴

一四六

山口 茂吉

一五〇

柴生田 稔

一五四

佐藤佐太郎

一五六

近藤 芳美

一六三

石原 純

一六六

古泉 千樫

一七五

釈 迢空

一八一

大塚金之助

一九三

三ヶ島葭子

一九七

今井 邦子

二〇一

尾上 柴舟

二〇五

金子 薰園

二二一

吉植 庄亮

二二五

岩谷 莫哀

二二九

森園 天涙

二三三

白井 大翼

二三七

福田 栄一

二三一

前田 夕暮……………二三五

若山 牧水……………二四三

若山 喜志子……………二五〇

長谷川 銀作……………二五四

窪田 空穂……………二五八

半田 良平……………二六六

松村 英一……………二六九

尾山 篤二郎……………二七五

窪田 章一郎……………二八〇

太田 水穂……………二八四

四賀 光子……………二九〇

大井 広……………二九四

木下 利玄……………二九七

前川 佐美雄……………三〇四

会津 八一……………三〇八

吉野 秀雄……………三二三

明石 海人……………三二八

青山 霞村……………三三三

鳴海 陽吉……………三三五

西出 朝風……………三三三

花岡 謙二……………三三八

西村 陽吉……………三四三

中村 孝助……………三四七

土岐 善磨……………三五四

石川 啄木	三六五
渡辺 順三	三八一
矢代 東村	三九三
坪野 哲久	四〇一
浅野 純一	四〇五
太田遼一郎	四〇八
赤石 茂	四一三
伊沢 信平	四一八
岡部 文夫	四二二

小名木綱夫	四二四
上田 穆	四二七
中野 嘉一	四三〇
高群 郁	四三三
山田盈一郎	四三八
林 亜夫	四四二
布施 杜生	四四六
岸上 大作	四四九

現代名歌選

落ち あい なお ぶみ
落 合 直 文

落合直文集

文久一（一八六一）——明治三六（一九〇三） 宮城県に生る。萩之家と号す。伊勢神宮教院、東京大学古典講習科に学び、第一高等中学校等に教える。明治二一年、長詩「孝女白菊の歌」で注目され和歌革新の意図を抱き、同二六年、あさ香社を結成。桂園派歌風の影響を明らかに残しつつ、そこに定着し得ないいらだちをも示すことによって、三十年代以後の鉄幹、柴舟、蕉園らを刺激した。『萩之家遺稿』の他、『日本文学全書』『ことばの泉』等の編著がある。

緋威の鎧を著けて太刀佩きて見ばやとぞ思ふ山ざくら花
 小瓶をば机の上に載せたれどまだまだ長し白藤の花
 萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころ此処と定めむ
 いざ子ども文車引き来今日もまたかの絵巻物説きて聞かせむ
 城あとと聞きにし岡に古瓦拾ひてをれば雉子鳴くなり
 簪もて深さ量りし少女子の袂に附きぬ春のあわ雪
 霜やけの小さき手して蜜柑むく我が子しのばゆ風の寒きに

長谷寺はこれより右としるしたる石を濡らして行く時雨かな

あかつきの聞の時雨の哀れさも恋せぬ人は知らずやあるらむ

牡蠣殻を載せたる海人が屋根の上に鵲鳴きて日は暮れむとす

やよや子ら東鑑に載せてある道はこの道春のわか草

田端にて根岸の友に逢ひにけり蛙鳴くなる春の夕ぐれ

碁をくづす音ばかりして旅やかた静かに春の夜は更けにけり

砂の上に我が恋人の名を書けば波の寄せきて影も留めず

渡殿を通ふ更衣の衣の裾に雪と乱れて散るさくらかな

明けなばと羽子板だきて母のもとに寝たる我が子よ罪なかりけり

藤壺に歌合ありと小式部を召し給ひけり春の夜の雨

大かたは掘りくづしたる貝塚の貝を濡らして降る時雨かな

猿曳の背にねぶりゆく猿の子をおどろかしても降る霰かな

町中の火の見やぐらに人ひとり火を見て立てり冬の夜の月

枯れのこる浮葉の上に蓮の実の飛ぶ音寒し冬や来ぬらむ

馬屋のうちに馬のもの食ふその音も幽かに聞ゆ夜や更けぬらむ

観音をきぎむ仏師が小刀の光も寒きともし火の影

里川のながれの見ゆる柴の戸に月待ちをれば水鶏なくなり

名も知れぬ小さき星を尋ね行きて住まばやと思ふ夜はもありけり

三足四足あとへ戻りて松が枝の藤の花をば仰ぎ見しかな

萩の花さきし朝も萩の花ちりし夕も君をこそ思へ

ふるさとの野寺の池は田となりてその片隅に蓮咲きにけり

月もはや西片町に下りくれば置く霜しろし唐橋の上

原町にめしひ二人が杖とめて秋の夕をなに語るらむ

このたびは云はむと思ひその事を云はでまたまた別れぬるかな

我が子をばいくさにやりて里の爺がむすめと二人早苗とるなり

桜見に明日は連れてと契り置きて子は寝ねたるを雨降り出でぬ

おくつきの石を撫でつつひとり言いひて帰りぬ春の夕ぐれ
をとめ子は摘みて碎きて棄てにけり薔薇の花には罪もあらなくに
いつはりの人ほど歌は巧みなりうち頷くな姫百合の花

つながれて眠らむとする牛の顔にをりをりさはる青柳の糸
家づとに買ひたる海苔もしめるまで雨降り出でぬ大森の里
うつしなば雲雀の影もうつるべし写真日和のうららけき空

父君よ今朝は如何にと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり
胸に置く氷ぶくろの厚氷とく我が病癒えよとぞ思ふ

めづらしく花さきにけり風車はやくも夏はめぐり来ぬらむ

枕辺に葉を置きて臥しながらつくづく見たり春のあは雪

き さ き の ぶ つ な
佐 佐 木 信 綱

思 草

雪室に酒をひやして室守が昔の恋をかたる夜半かな

とこやみの闇の底より何ならむ我を呼ぶらむ声の聞ゆる

幼きは幼きどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶきぬ

形なくかげなき鬼にせめられてやせ細り行く我身なるらむ

木の葉みな枯れたる山のいただきに死の太后打笑み給ふ

幸に酒かふ銭のあまれるを今宵の月夜君とあかさむ

きちがひとりたひはやしてきちがひになりしところを知る人のなき

明治五（一八七二）——昭和三八（一九六三） 竹柏園と号した。三重県に生る。東京大学古典科卒。国学者であつた父弘綱に歌を学び、のち高崎正風に師事した。明治三一年、父の後を受け、竹柏会を主宰し、機関誌「心の花」を刊行、歌は心の花であるとして、多くの門人を指導した。その歌風は温雅清新、情趣豊かである。歌集には、『思草』（明治三六年）、『新月』（大正一年）、『常盤木』（同一年）等があり、他に国文学関係の編著も多い。

のむ酒にうき忘れしはしばしにて又さびしくもなる心かな
ふところに小猿抱きて猿曳の雨にぬれゆく夕まぐれかな

新月

現代名歌選

まがね^と 溶^はけ 炎^{のほ}の 滝^{たき}の なだれ 落^おつる 溶^{よう}炉^ろの もとに うたふ 恋^{こひ}唄^{うた}
野^のの 末^{すゑ}を 移^い住^{じゅう}民^{みん}など 行^ゆく 如^{ごと}き くちなし 色^{いろ}の 寒^{さむ}き 冬^{ふゆ}の 日^ひ
寺^{てら}男^{をとこ}と ぼく と 行^ゆく、 猶^{なほ}ゆるゝ 撞^{しゅ}木^{もく}の 綱^{つな}を 見^みかへりも せで
蛇^{へび}遣^{つか}ふ 若^{わか}き 女^{をんな}は 小^こ屋^やい でて 河^か原^{はら}に おつる 赤^{あか}き 日^ひを 見^みる
つ かれたる 心^{こころ}の 国^{くに}に 来^{きた}り 住^すむ 悔^{くひ}の 一^{いち}族^{ぞく} 悲^{かな}し びの 子^こ等^ら
月^{つき}の 夜^よを 黒^{くろ}き 衣^{きぬ}き し 一^{ひと}むれの 沈^{しじま}黙^まの 尾^おは 行^ゆき 過^すぎに ける
遠^{とほ}つ 人^{ひと}お もへば 悲^{かな}し ゆく 春^{はる}の 藤^{ふたば}波^{なみ}の 花^{はな}ほろほろと 散^ちる
油^{あぶら}う く 工^{こう}場^ばの 裏^{うら}の たまり 水^{みづ}雲^{くも}間^まに うすき 秋^{あき}の 日^ひの 色^{いろ}
山^{やま}の 王^{わう}類^{るい}眷^{けん}属^{ぞく}を 召^めつ づ へ 語^{かた}ら ふ 夜^よなり 灰^{はい}白^{しろ}く 降^ふる

後よりせまる怪しきかげ知りてせんすべをなみ猶歩みゆく
春の夜の物やはらかさ、きしりゆく電車の音も胸に親しき
いさぎよくほゑみてさて別れしは我をばしひて偽りしのみ
死の海の海底深く眠りてをあるべかりしが覚めし悲しび
皆消えぬ今日も昨日も一昨日も砂につけたる我が足あとは
村の馬河原につどへ伯樂が蹄鉄なほすさむき秋の日
「うつせみの世やは二ゆく」、否あらじ、又の世にして語らはむ思
百舌が鳴く、又鳴く、二人歩くのが羨ましくて鳴くか、又鳴く
船腹が黒う光れる秋の日の退潮時の物のかなしみ
秋の夜をふと眼覚れば明らかに洋燈の点いて居るが嬉しき
君を思ひ百里は来けりいづこまで行きなば君を忘れ得べけむ
ほほゑめばはつかに見ゆる片ゑくぼとまとが赤き白かねの皿
向ひ居て心々の人住める家といふものをなどはなれ得ぬ